

## 2006年を振り返る[トレード編] 【編集】[雑感]

2006年は、トレードの観点から見ても波乱の一年だった。ライブドアショックで多くの投資家が出鼻をくじかれた中、4月までは辛うじて利益を積み重ね、何とか耐えてきた。

しかし、5月の日経平均急落の煽りを受けて、それまでの利益を一気に放出し、ほぼ同額の損失に転じてしまった。

その後は、なかなか損失体質から抜け出せないという悪循環に陥り、5ヶ月連続の赤字収支という記録を打ち立ててしまった。

この間、システムの見直しやリスク管理の徹底、追加資金の投入により、第4四半期でようやく連続して利益を計上できるまでに回復した。それでも年央の損失はあまりにも大きく、今のところ、今年の収支は若干のマイナスとなりそうである。

今年の失敗の最大の原因は、昨年末の失敗によるドテンホールドシステムへの不信感と、そのための買い主体の裏デイトレへの過重な依存にあった。

システム開発を後回しにし、リスク管理を中途半端に放置したツケが、5月以降の急落相場における損失拡大につながったようだ。

年初においては、複数の買い主体の裏デイトレシステムを交互に運用することで、最大利益の達成とリスク管理とが両立できると考えていた。事実、この考えは4月までは有効だった。この間、市場の不安定さとは裏腹に、少額ながらも安定して利益を上げてきた。

しかし、5月の相場急落で、上記のシステムはもろくも崩壊した。複数のシステムの中で最も安定したシステムを運用しようにも、全てのシステムが大きな損失を出す状態に陥ってしまったのである。輸出企業ベースのシステムも内需関連企業ベースのものも、全く同様に運用成績を落としていったのだ。

5月はNY市場が急落し、東京市場もそれに追従したために、買い主体の裏デイトレにとっては最悪の展開になっていた。裏デイトレに適した日経平均採用銘柄の多くが、連日ギャップを空けて下落していったのである。

しかし、ドローダウンの後に収益拡大期が訪れるとの原理原則から、運用を停止することもできず、そのまま損失を拡大させていってしまった。

もし、現状のリスク管理手法を取り入れていれば、あそこまで損失を拡大させることはなかったと思われる。

月々の出金も相まって投資資金は加速度的に減少し、市場からの退場寸前まで追い詰められた。そんな中、父が兄と同居することが決まって、それまで形式上父に預けていた、去年世界した母の遺産を皆で分配相続することになり、何とか踏みとどまることができたのである。

この資金を無駄に使うことはできない。そこで、システムの見直しを徹底すると共に、標準誤差に基づいたリスク管理を導入し、覚悟を決めた上で、現在の運用に至っている。

一旦退場することも考えたが、そうするとトレードの研究や、その結果を報告する機会であるブログの更新が大幅に滞る可能性が高いため、もうしばらく頑張ってみることにした。

5月の急落や12月の急騰など、今年の株式相場は多様な推移を演じた。そのような中で、買い主体の裏デイトレシステムが機能しなくなったことは当然である。

9月以降にドテンシステムに切り替え、さらに10月以降にはドテンホールドシステムとの複合システムにしたことが、低迷脱出のきっかけになった。

ドテンホールドシステムは、シグナルのタイミングさえ間違わなければ、あらゆる相場環境に適應できるシステムである。ボックス相場や、上昇あるいは下降のトレンド相場にも対応できる。

しかし、昨年末のようにトレンドが急に変わった場合には、どうしても反応が一呼吸遅れてしまう。

そこで、ドテンシステムとドテンホールドシステムとを複合運用することにより、ドテンホールドシステムの反応の悪さをヘッジすることにしたのである。

また、システムの複合により、標準誤差が複合前のシステムよりも小さくなるというメリットもある。

さらに、システムが複雑化することにより、第三者からシステムの中身が見えにくくなる。買い主体の単純な裏デイトレの場合だと、第三者からの攻撃を受けて機能停止する可能性が無くにしも非ずだった。弱小個人投資家に対して、資金力のある第三者が大人気ないことをするのは考えたくないが、その可能性はゼロではないだろう。

今年は大きな苦境に立たされた1年だったが、トレードに関する研究は大きく進展した。昨年までは効率的なシステムを造ることに腐心したが、今年はリスク管理やそこから派生した様々な手法をいろいろと試すことに注力した。

システムトレードのみならず裁量的な株式投資においても、いくつかの有用な知見が得られたことは大きな成果だった。

評価技術という観点で見ると、システムトレードも裁量トレードも同じである。両者で共通の評価基準を用い、客観的に評価することにより、大きく異なっているかに見えた両者の手法が、大きな関連性を持っていることが分かってきた。

この興味深い事実については、来年以降も研究を継続していくつもりである。

来年の投資戦略は明確である。現行システムの運用とその管理しかない。システムが機能している限りは、期待収益率とそのブレ幅は決定している。

実際の損益額は、対象銘柄の株価推移に依存する部分もあるが、それは建て玉数の違いによる額の多寡の問題であり、プラスかマイナスかという本質的な問題ではない。

もし、資産カーブが管理限界を下回ったら、直ちにシステムを停止し、新たなシステムを運用することになる。

システムの切り替えにはできるだけ時間が掛からないよう、準備を怠らないようにしなければならないが、中途半端な見切り発車は厳禁である。今年の二の舞を演じてはならない。

来年はトレードだけで生活しようなどと気張らず、月々あるいは年間の収支が黒字になることを目指したい。そのような実績が備わってくれば、トレード以外にも収益の道が開けてくるのではないかと考えている。

---

2006-12-28 16:51 nice!(0) コメント(0) トラックバック(1)  
共通テーマ:株